

教育目標	心豊かにたくましく、生き生きと遊ぶ子どもの育成
年度末の最終評価	
自己評価	教育目標の達成状況、次年度に向けた見直し ・目標達成のため、「夢中になって遊び込む子どもの育成～つながりが生まれる環境や援助に着目して～」という研究主題を考えた。今年度は制限なく、エピソード研修や園内研修ができ、日々の保育の振り返りの中で各学年の子どもの姿を共有しながら、よりつながりが生まれる環境構成について話し合い、遊びの場づくりができた。 ・環境は遊びの場だけでなく、人も重要である。異年齢での取組は年度当初よりうまく機能したと思う。横のつながり、担任とのつながりから、縦のつながり、多くの指導者とのつながりができた。遊びに広がりが見え、目標に迫る一つになった。 ・幼児連携や幼小連携も今年度大きく進んだ。異年齢の取組以上の広がりがあったと思う。次年度は効果的な時期、回数を吟味し取り組みたい。特に小学校の「架け橋プロジェクト」については2年次ということもあり、次年度、より年間見通した効果的な連携を考えたい。
学校関係者評価	学校関係者による意見・支援策 ・保育については、遊び込む中で育てる公立幼稚園の良さを今後も継続してほしい。露地栽培で季節を感じる以前からの取組を大切にしながら、Wi-FiをはじめICT環境がよくなっていると聞くので、その活用も併せて進めてほしい。 ・少人数であるので、異年齢の取組も幼児連携も幼小連携も価値のある取組だと思う。「架け橋プロジェクト」は園児獲得にもつながるのではないだろうか。 ・今年度、満3歳児預かり保育を始め、次年度以降もよりよいものにしようと考えていると聞いた。園児獲得のためにやっている取組が増えれば大変だと思うが、一人でも多くの方に周知でき、利用してもらえるよう努力してほしい。広報には協力したい。

学校関係者評価の評価日・評価者

	評価日	評価者
中間評価	10月17日	学校運営協議会 理事
最終評価	2月15日	学校運営協議会 理事

（１）幼稚園教育（保育の改善・充実）について

具体的な取組

- ・ 子どもが夢中になって遊び、自分の力を発揮し、友達と関わる楽しさや協働する喜びを感じるための教員の援助や環境構成を計画的に行う。
- ・ 少人数園として、クラスだけでは広がらない取組を見極め、異年齢の活動を積極的に取り入れる。また異年齢の取組を増やすことで自律性（折り合う心）を育む保育を実践する。
- ・ 子どもが心身ともに健やかに育つため、十分に体を動かして主体的に遊ぶ楽しさが感じられる保育を展開する。そのために安全で安心な環境づくりを絶えず見直し、改善を図る。
- ・ 保育の専門性を高め、子どもの育ちを保障していくために、園内研修を充実する。
- ・ 子ども一人一人へのねらいをもち計画性をもった保育を実践すると共に、子どもの姿から一日の保育を振り返り、改善していくPDCAサイクルを園として組織的に行う。（週案・個別の指導計画等の活用）。

（取組結果を検証する）各種指標

- ・ 幼児の姿の変容・週案の反省、評価の記述・事例検討
- ・ アンケート項目①「幼稚園は教育目標に向けての保育を行っている」②「幼稚園の環境は安全で子どもが豊かな体験ができるよう整えられている」⑧「子どもは楽しく幼稚園に通っている」⑨「子どもは今夢中になっているものがある」

中間評価

各種指標結果

・ コロナ感染症の種別が5月8日に2類から5類へと移行された。これにより大幅にコロナ前の活動に近づくことができた。マスクが強制でなくなり、指導者と子どもが互いに表情を見せ合うことでよりコミュニケーションが取れるようになった。今年の夏にはインフルエンザの流行もあり、感染対策は継続の上であるが、行事もより緩和された中でやれることが大いに増えたと思う。検証のための園内での研究保育も予定通り実施できている。概ね高評価を得たと考える。

・ アンケート結果①A96%B4%②A88%12%⑧A96%B4%⑨A76%B20%C4%

【A大変そう思う Bそう思う Cあまりそう思わない Dそう思わない】

自己評価

分析（成果と課題）

- ・ 夢中になって遊ぶための泡や水、砂などが子どもたちの主体的な遊びにつながったと思う。さらなる環境構成の工夫、教員の支援について今後も子どもの姿から振り返り、話し合いきたい。
- ・ 年中組は男児4名に女児3名が加わり7名になった。少人数であることに変わりはないが、クラスでの活動が活発になった。異年齢での活動で、さらに遊びの集団の人数を増やすことは有効であったと考える。
- ・ 異年齢の取組については絶えず検証をしている。例えば運動会に向けての遊びの中で、年長の活動の様子を見て、下の子たちが自分たちから喜んで参加しているか、参加しない子の手立てはできているか等々、活動内容の必要性については振り返る必要があると考える。
- ・ 安全な環境を維持するための定期点検は複数体制で毎回違う目で確認できるようにし、不備のある場合はすぐに直すようにしている。

分析を踏まえた取組の改善

- ・ 少人数であることは、遊びの幅や友達関係が広がらないという弱点はある。その辺りを踏まえ、異年齢の取組をここ数年来取り組んでいるが、効果のある活動を研究していきたい。
- ・ 目が届きやすいという少人数の長所が、かえって教職員に油断を生むことのないように、日々子どもの安全優先を考える教職員集団をして緊張感を絶えずもった保育を行いたい。

	・幼稚園教育研究会主催の研修も実際に他園の研究を見ることができるようになった。自園の取組を見直すためにも積極的に参画していきたい。
	(最終評価に向けた) 取組の改善を検証する各種指標 ・コロナ禍の制約が減り、やりたい活動が大部分できるようになってきた。園の環境や保育がより効果的なものになっているか、今の実態に合ったものになっているか。 ・保護者のアンケートや日常の保護者からの聞き取った意見から検証する。
学校関係者評価	学校関係者による意見・支援策 ・コロナ制限が5類に移行されて、昨年以上に祖父母参観や運動会など制限なしで参観ができているのがよい。 ・昨年より人数は増えているが、少人数園であることに違いない。異年齢の取組については今後の研究してほしい。 ・公立幼稚園の保育はよい取組をしていると思う。特にほぼ全員が楽しく幼稚園に通えているのは素晴らしい。

最終評価

	(中間評価時に設定した) 各種指標結果 ・後期はさらにコロナ前に近い活動ができるようになった。参観も制限を外し、より多くの目で見ただけのようにもなった。幼稚園の取組の評価に関して、マスクのない子どもの表情そのものから幼児期の姿を見取ることもしやすくなり、それが評価につながっていると考えます。 ・インフルエンザは後期になっても全国的に流行した。しかしコロナ禍で培った感染症対策のおかげか、本園は学級閉鎖をすることもなく予定通りに保育ができた。また園内研修も計画的に進み、効果的な環境や保育であるかの検証をするとともに、次年度に向けて実態から乖離したものがないか話し合えた。 ・アンケート結果①A100%②A92%8%③A96%B4%④A77%B23%
自己評価	分析(成果と課題)、重点目標の達成状況、次年度の課題 ・各学年でコミュニケーションをとり、その週ごとの活動の中での遊びの場を考えている。週案を活用し、日々振り返りながら環境設定を話し合った。 ・本園の研究のキーワードは「つながり」である。夢中になって遊び込む子どもを育成するために、つながりが生まれる環境や援助に着目してきた。週案もつながりを意識して、保育計画に役立ったと思う。「つながりシート」の活用は継続という点において課題が残った。次年度に向けて改善していきたい。園内の異年齢のつながりは有効であった。 ・その時の状況にもよるが、多くの子どもたちや大人の表情が見られることになったことで、園児たちに入る情報が増え、よりつながりが深まったと思う。
	分析を踏まえた取組の改善 ・異年齢の取組は、少人数園として集団の大きさを広げるのには効果大きい。ただ同じ遊びを同じ場所でしていても、子どもたちに付く力はそれぞれ違うこともあるので、指導者側がしっかり見取ることが必要である。 ・個々の教員の見取りが、遊びの広がりや友達関係の広がりにつながっていくためには、より多くの目で見た結果を共有しなくてはならない。今後も教員同士がつながり、振り返ったことなどを話し合い、次の保育実践に生かしていきたい。 ・前年度との比較で考えても、マスクなしの活動は幼稚園児に言葉だけでない表情での働きかけができ、子どもたち同士、子どもたちと教員の関係性がより深まったように感じる。教員と保護

	者との距離感も縮まった気がする。
学校関係者評価	学校関係者による意見・支援策 ・少人数園として、異年齢保育などつながりを意識しているのはよいと思う。 ・マスクと表情の話が出ていたが、幼稚園の子どもにとって実体験はとても大切だと思う。栽培活動や園外保育などは是非充実させてほしい。ICTの活用が幼稚園でも言われていると聞くのでその使われ方については今後も研究してもらいたい。 ・環境構成の中でも、安全・安心に関わる事柄は最優先である。施設・遊具の補修や木々の剪定は今後も継続することが望ましい。

（２）架け橋期の教育の充実に向けた幼保小連携・接続に関して

具体的な取組 ・小学校期以降の学習につなぐ視点で、本園研究主題を踏まえた園内研修を計画的に行う。 ・小学校期の学びにつなげる「学びに向かう力」の育成を意識した保育を推進する。 ・乾隆小学校、紫野小学校との連携、交流を通して教員の相互理解を図り、幼小の円滑な接続を推進する。特に乾隆小学校とは架け橋プログラムを意識した子ども同士の交流や教員同士の交流（授業参観・保育公開の相互交流や合同研修を通しての相互発信を含む）を計画的に実施する。 ・「ことばの伝え合い」を研究する乾隆小学校とのつながりを考え、子どもが遊びや生活の様々な場面で言葉に触れる環境を充実する。 ・翔鸞幼稚園との交流も再開する。	
（取組結果を検証する）各種指標 ・架け橋期のカリキュラムを意識した幼小接続の指導計画の見直しはできたか。 ・交流について事前・事後に検討は内容についても十分できたか。 ・公開保育・合同研修の回数や内容については十分できたか。 ・アンケート項目③「保幼小連携、地域との連携等の取組は子どもの育ちにつながっている」	

中間評価

各種指標結果 ・今年度より、乾隆小学校との連携・交流は実際の行き来が再開できた。小学校が「幼保小の連携・接続（架け橋プログラム）実践研究事業」の「実践研究校」として指定を受けたので、子どもや教職員の交流が活発化している。 ・幼稚園年長児担任が1学期開始当初1年生の学級で紙芝居や手遊びを行った。公開保育や合同研修も行っている。幼稚園の砂場で小学校の1年生が造形遊びをする、運動会の取組を互いに見合うなど初年度として計画的に進められた。 ・アンケート結果③A84% B16%	
自己評価	分析（成果と課題） ・乾隆小学校との連携・交流は、コロナの制限緩和もあり大いに進んだ。管理職だけでなく教員が互いの保育や授業を見て、対面での研修をもつことができた。子ども同士の交流もでき、順調に進んでいる。 ・乾隆小学校以外にも本園の子どもたちが行った小学校には管理職が参観に行き、子どもの様子を見たり、話を聞いたりしてつながりはもっている。どう発展させていくかが課題である。 ・翔鸞幼稚園との交流も互いの行き来を含め再開できている。

学校関係者評価	分析を踏まえた取組の改善 ・今後、1年生の生活科の授業研究を年長児も合同で行う予定がある。事後研究も互いの教員が入り行う予定なので、架け橋プログラムとしての可能性を探りたい。 ・後期に向けて、進学先の小学校につなげられるように保育を行う中で一人一人の子どもをしっかり見取りたい。就学支援シートや個別の指導計画等の活用も行う。 ・架け橋プログラムの趣旨から考えると、同じ公立の翔鸞幼稚園との連携だけでなく、近くの就学前施設の取組も学ぶことができればよいと思う。
	(最終評価に向けた) 取組の改善を検証する各種指標 ・乾隆幼稚園との「架け橋プログラム」を意識した各種取組が計画通りに進んだか。 ・卒園児を各小学校にうまくつなぐことができたか。 ・保護者アンケートや日常の保護者からの聞き取りから検証する。
	学校関係者による意見・支援策 ・今年度、乾隆小学校との連携が進んでいるようで良いと思う。架け橋プロジェクトに小学校が指定され、幼稚園とともに研究を進めてもらいたい。 ・乾隆小学校以外との連携は今後少しずつ広がっていくように考えてほしい。卒園児へのつなぎは、必ずしてほしい。 ・翔鸞幼稚園との連携をしているのは大事なことだと思う。難しいと思うが、架け橋期の取組を考えると公立幼稚園の保育を他園にも広げる方法はないのか。

最終評価

自己評価	(中間評価時に設定した) 各種指標結果 ・乾隆小学校が「幼保小の連携・接続（架け橋プログラム）実践研究事業」の「実践研究校」に指定された関係で交流が活発化しただけでなく、年間見通した連携が計画的に実践できた。 ・乾隆小学校の2年生の生活科のフェスティバルの客として4、5歳児が参加するだけでなく、1年生の生活科に合同授業・保育として5歳児が参加できた。また小学校との合同研修も実施できた。 ・担任が中心となり、入学予定小学校と面談、電話連絡等の連携は行っている。就学支援シートや個別の支援シートも必要に応じて活用している。 ・今年度も乾隆小学校の子育て講座の講師に園長が出向いた。 ・アンケート結果③A96% B4%
	分析（成果と課題）、重点目標の達成状況、次年度の課題 ・管理職の交流や5歳児と1年生担任だけの交流であったのが、小学校の教員が幼稚園の公開保育を見てももらったり、幼稚園の教員が小学校の授業参観に行ったり、小学校・幼稚園の全体の研究という意識が出てきている。 ・翔鸞幼稚園との交流も計画的に行き来ができ、回数を重ねるごとに名前や顔を覚えている友達として交流できるようになった。公立園以外との交流に発展していくのは課題が多い。 ・紫野小学校にも管理職が行事や参観に顔を出すように努めた。子どもたちの様子を見て、保護者の聞き取りをしている。 ・乾隆小学校や紫野小学校以外にも、進学先の小学校すべてと個別の子どもについての情報交換をしている。
	分析を踏まえた取組の改善 ・コロナ禍で滞っていた互いの行き来が活発になると、教職員同士の親しみが変わる。互いを知ることが第1歩であると観点では、1年次は大きく動いたと考える。次年度、教職員体制が変わ

	っても、同じ方向で2年次が進められるようにしたい。 ・ 架け橋プログラムとしての合同研究保育・授業は、その後の研究協議会も含め互いの担当者以外の教員や教育委員会からの参加者もいて有意義な場になった。次年度も年間を通して計画的に進めていきたい。 ・ 翔鷹幼稚園との交流は盛んになったが、他の就学前施設との交流は今後の課題である。どのように働きかけていくのがよいのかを考えていきたい。
学校関係者評価	学校関係者による意見・支援策 ・ 後期もさらに乾隆小学校との連携が進んでいるのがよい。「架け橋プロジェクト」に取り組んだ成果が2年次にも続くようにしてもらいたい。 ・ 卒園児へのつなぎについて、昨年より電話だけでなく、行き来して交流することが増えているのがよいと思う。 ・ 乾隆小学校区には、乾隆幼稚園以外の就学前施設がないので、乾隆小学校の架け橋プロジェクトの取組に他の施設が入っていないのは仕方ないと思うが、小学校からの働きかけが大事かもしれない。

(3) 預かり保育に関して

具体的な取組	
・ 社会全体で子育てを支えるうえで預かり保育が果たす役割を認識し、地域に周知するとともに、地域資源の活用を含め、その充実を図る。 ・ 就労等時間的に幼稚園という選択肢がなかった家庭に、早朝8時から最大18時までの預かり時間のあることを広報する。新2号により補助の出ることも周知する。 ・ 安全、安心な環境で家庭的な雰囲気をつくる。 ・ 担当者の研修を奨励し、預かり保育指導計画を見直した上でより望ましい活動を実施する。	
(取組結果を検証する) 各種指標	
・ 預かり保育の参加人数とその活動内容や指導計画の見直し状況 ・ 預かり保育や新2号についての問い合わせ件数、利用家庭の割合 ・ アンケート項目④「さくらんぼ組や預かり保育等の子育て支援の取組があることを知っている」⑫「子どもは楽しんで預かり保育に参加している」	

中間評価

各種指標結果	
・ 預かり保育の利用を人数は25人中21人で、全体の84%になる。サッカー教室や水曜日の午前保育後の利用と限定した方もいるが、必要に応じて利用されている。 ・ 早朝保育の活用も昨年度より周知されたためか、利用が増えてきている。 ・ 新2号は現時点で14名になる。半数以上の方が制度の活用をしている。 ・ アンケート結果④A84%B16%⑫利用者は全体の84%中A71%B19%	
自己評価	分析（成果と課題） ・ 預かり保育や利用に向けての新2号の認知度は高い。今年度から始めたアプリの導入で保護者との連絡もスムーズになっている。 ・ 昨年度末の転入園児は、公立幼稚園の保育を受けたいとして本園に来たが、18時までの預かり保育がなければ入園は難しかったと言っている。早朝預かり保育も含めて入園の決め手になれる

	ばよいと思う。 ・今年度は年度当初より月 1 回ではあるがサッカー教室や絵本ママの取組ができています。そのための利用者もいる状態である。
	分析を踏まえた取組の改善 ・預かり保育がなければ支障が出る新 2 号方は勿論、新 2 号ではない方も、その日の状況で利用しやすくなっていると思う。本園を選ぶ時の一つになってほしい。 ・在園保護者の認知度は十分なので、未就園保護者に届く広報を今まで以上に進めなければいけない。年少児も新 2 号であれば 4 月から利用できることを知り、活用されていたが、入園を決めたからの説明で知ったようなのでもっと早くからの広報が必要である。 ・昨年人気のあった茶道教室も後期には行いたい。
	(最終評価に向けた) 取組の改善を検証する各種指標 ・預かり保育の内容、特に保育時間の遊びについて、研修を通してより良いものになっているか。 ・預かり保育の制度の認知、時間設定、内容、新 2 号などが適切に周知できているか。 ・保護者アンケートや日常の保護者からの聞き取りから検証する。
学校関係者評価	学校関係者による意見・支援策 ・午前 8 時からの早朝預かり保育や 1 8 時まで預かり保育があることは、私たちは知っているが、どれだけ広報できているのか。土曜日が休みであることは仕方ないとはいえ、園児を増やす要素になると思う。 ・7 月から未就園児満 3 歳児の預かり保育を始めたようであるが、これも園児を増やすことにつながるとよい。

最終評価

	(中間評価時に設定した) 各種指標結果 ・預かり保育担当者に対しての研修は 1 5 園対象で年 2 回あり、保育の内容や遊びのための玩具等、交流している。園によって人数規模が違うこともあるので、自分の園に必要なことを交流して、保育の改善につなげることができた。 ・預かり保育については周知徹底できている。サッカー教室やお茶体験活動を預かり保育に入れることにより制度の認知も確かなものになっている。新 2 号の認定者も年度末で 5 7 % と半数以上になっている。アプリを使つての申し込みにも慣れてきている。早朝保育の利用も広まっている。 ・アンケート結果④ A 92 % B 8 % ⑩ 利用者は全体の 88 % 中 A 83 % B 13 % C 4 %
自己評価	分析 (成果と課題)、重点目標の達成状況、次年度の課題 ・預かり保育は、幼稚園に通うための要素の一つになってきている。早朝 8 時から 1 8 時まで、周知はでき利用も広まっている。新 2 号の申請も増えてきている。 ・利用については、アプリを活用するようになった。当初よりもスムーズに運用できるようになっていると感じる。 ・年度当初より、サッカー教室を月 1 回プログラムに入れた。後期にはお茶体験も月 1 回ペースで入れた。当日の参加人数を見るといつもより増えているので、次年度も内容を考えたうえで実施したい。広報手段の一つになった
	分析を踏まえた取組の改善 ・未就園保護者への周知が、園を決めるときに保育園だけでなく、幼稚園も選択肢に入る大きなポイントである。土曜日に預かり保育がないことは公立幼稚園のウィークポイントであるが、土曜日を必要としない未就園保護者には子育て支援の取組を活用し入園児を獲得したい。

	・毎年の預かり保育の研修を大切にし、より安全により楽しい保育になるように保育者の力量アップにつなげたい。遊びの玩具なども毎年、見直し更新したいと思う。 ・サッカー教室やお茶体験といった。預かり保育の広報的な取組も要望が多いので、回数はともかく、他にできることはないか内容について検討は続けていきたい。
学校関係者評価	学校関係者による意見・支援策 ・新2号が半数以上いるということは、預かり保育がなければ、園児数がさらに減っていたに違いない。土曜日はともかく、8時早朝預かりと18時までの預かり保育をさらに周知していくことは大切である。 ・サッカー教室やお茶体験が子どもの楽しみになっているのなら、指導者の得意分野などで、子どもが楽しめるものを検討していくといいのではないかな。本来の預かり保育とは趣旨が違ってもいいが、預かり保育に抵抗のある子には良い効果があると思う。

（４）子育ての支援に関して

具体的な取組	
・ 保育公開や自由参観などの教育発信に努め、開かれた幼稚園づくりを推進する。 ・ 地域の児童館や地域諸団体との連携を図り、子育て相談や園庭開放を実施するなど、地域の子育て支援センターとしての役割を果たす。 ・ 園庭開放を行うことで未就園児保護者が気軽に入れる空間づくりを考える。できるだけ未就園クラス「さくらんぼ組」には顔を出し、気軽に相談を受ける雰囲気をつくる。 ・ 「さくらんぼ組」の実施曜日、回数、内容等、定期的に見直す。	
（取組結果を検証する）各種指標	
・ 子育て支援の取組回数や参加人数、教育相談件数 ・ 未就園児保護者へのアンケート、特に「さくらんぼ組」についての聞き取りを実施する。 ・ アンケート項目④「さくらんぼ組や預かり保育等の子育て支援の取組があることを知っている」	

中間評価

各種指標結果	
・ さくらんぼ組は毎週月・水の2回行っている。毎回2～8組程度の参加があった。毎回園長が部屋に出向き、聞き取りをしている。説明会は土曜日にも設定したが今回は1組のみであった。7月からは毎週金曜日の9時～12時に満3歳児の預かり保育を開始している。 ・ 園庭開放の利用も真夏の時を除き増えてきている。コロナの制限が緩和され、子育て支援の取組はほぼ予定通りできるようになった。 ・ 「ほっこり子育て広場」は今年度も学期1回の希望制を計画した。第1回は4名の参加でゆっくりと子育てについての保護者交流ができた。 ・ アンケート結果④A84% B16%	
自己評価	分析（成果と課題） ・ 今の未就園児はコロナ禍に産まれた世代であることが原因か、総数自体減った気がする。少子化の中、選んでもらうためには保育内容以外の問題も大きく難しさを感じる。 ・ さくらんぼ組も一定、来る方が決まってきたが、保育会の方の協力で、「ようちえん夏祭り」を開催すると前から来ている方を含めて23組の参加を得た。保育会は保護者の声を集めてチラシにいただいた。HPにも載せてアピールしている。

	・さくらんぼ組については、予定をHPに載せたり、小規模保育園や児童館に直接チラシをもっていったり広報に努めている。
	分析を踏まえた取組の改善 ・さくらんぼ組によく来られる方は面識もでき、色々な話もできる。初めて来られたり、時々来られたりする方とのコミュニケーションは大切であると思う。 ・保育会の口コミのチラシは効果的であった。夏祭りやゆずります会と合わせたので人集めに関しては相当役立ったと考える。 ・今年度「さくらんぼ組」のチラシを配付する施設を昨年度より増やした。HPの発信を含め意識した広報を今後もしていきたい。
	(最終評価に向けた) 取組の改善を検証する各種指標 ・未就園児クラスの登録者数、参加人数や参加している未就園児保護者の方からの聞き取りから検証する。 ・子育ての話のできる場がどれだけでもてるか。保育会主催の茶話会も含め、ほっこり子育て広場などの特設したものも含め、日常のさくらんぼ組で話が聞き取ることができたか。 ・保護者アンケートや日常の保護者からの聞き取りから検証する。
学校関係者評価	学校関係者による意見・支援策 ・「さくらんぼ組」について広報する施設（小規模保育所、児童館等）を増やしていることで、園の努力がわかる。ホームページを活用しているのもよいと思う。 ・「ようちえん夏祭り」で保育会が考えた「乾隆幼稚園を選んだ理由」チラシはとても良いと思う。ホームページにもあげたようなので園児が増えることに繋がってほしい。

最終評価

	(中間評価時に設定した) 各種指標結果 ・コロナの状況が改善してから、未就園児クラス「さくらんぼ組」の登録者数、参加人数が増えてきている。参加人数は毎回4～10名である。保護者同士の会話も増え活発になっている。できるだけその場での話を聞き取ることで、ニーズなどが見えてきている。園庭開放も利用者が増えてきた。 ・満3歳保育を7月から始めた。10月からの参加者も含め、2名の「いちご組」は年度末まで続いた。次につなぐのにはとても効果的であったと思う。 ・最終のほっこり子育て広場には、「いちご組」の保護者にも声をかけた。入園前から子育ての話を聞いてもらえる機会がもてたことは素晴らしいと考える。第3回は10名の参加であった。 ・アンケート結果④A92%B8%
自己評価	分析（成果と課題）、重点目標の達成状況、次年度の課題 ・コロナが収束してきたこともあり、参加人数が増えてきた。初めての方も多く、コミュニケーションを通して、さくらんぼ組を知ったりリサーチをしている。「いちご組」についてもとても関心があることが分かった。 ・小規模保育所や児童館など8ヶ所に「さくらんぼ組」の予定表を置かせてもらう施設を増やしてきた。新規できた方に聞くと、各施設やホームページ、口コミとそれぞれのきっかけがあるので、今後も様々な広報手段を考えていきたい。広報時期も大切かもしれない。 ・さくらんぼ組で次年度からの満3歳児「いちご組」について広報を始めた。新たな取組として本園入園につながる大きな取組であると考えている。
	分析を踏まえた取組の改善 ・ほっこり子育て広場に「いちご組」の方に参加してもらったことはよかったが、「さくらんぼ

	組」まで広めていくのも、本園や保護者同士のつながりが増え、入園児を増やす取組になるのではないかと考える。 ・さくらんぼ組によく来られる方と面識ができるとコミュニケーションが取れる。まず初めての方に来てもらうことが大切なので、様々な方法を次年度も続けるとともに、より効果的な方法を考えていきたい。 ・在園児保護者の認知度は十分なので、保護者の口コミの力も一層お借りしたい。
学校関係者評価	学校関係者による意見・支援策 ・未就園児の取組としての「さくらんぼ組」や園庭開放の取組の利用人数が増えてきたことはとても望ましい。少子化で人数確保は難しいかもしれないが、考えられる広報を継続的に続けることがよいと思う。 ・満3歳児「いちご組」の取組は可能性があると思う。「さくらんぼ組」の開催曜日や回数も含めてより良いものにしてほしい。

（５）地域とのかかわり（社会に開かれた教育課程）に関して

具体的な取組	
・学校運営協議会委員の方との情報交換や連携強化に努め、関係者評価を活用し、教育活動の改善を図る。また地域の資源を活かした指導計画を作成する。 ・積極的に地域の行事に参加するなど、地域とのつながりを大切にする。地域の人をはじめ様々な人と交流し、親しみを感じ社会の一員として必要な公共心の芽生えを育む保育を推進する。 ・自園の取組や教育内容をHPや幼稚園地域版だよりで発信し、開かれた幼稚園づくりする。	
（取組結果を検証する）各種指標	
・日々のつながりから、地域の方々の声を受け止める。 ・地域の中の行事に、子どもたちは一員として参加できてきたか。 ・アンケート項目③「保幼小連携、地域との連携等の取組は子どもの育ちにつながっている」	

中間評価

各種指標結果	
・地域とのつながりはコロナ以前に戻ってきている。乾隆まつりや乾隆敬老会にはステージで年長児が演技を披露した。保育会のブースもあった。嘉楽学区の敬老会にも出る予定になっている。 ・日々の交通安全会の方の登園時の見守りの他、地域女性会の「洛いも」の取組、民生児童委員の「すくすくクラブ」との連携、運動会では小学校のグラウンドをお借りするだけでなく、体育振興会の方に様々な支援を受けた。 ・乾隆学区回覧用地域だよりを月1回発行し、門の掲示板に掲示していたが、本年度からはHPにもあげるようにした。 ・アンケート結果③A84% B16%	
自己評価	分析（成果と課題） ・学校運営協議会も第1回から対面で開催できた。配付物をもって回っている時に話すだけでなく会議の場で意見が伺えた。 ・地域のイベントに参加していくことや自園の運動会に来賓として地域の方を招待することを通して、地域との垣根が低くなったと思う。見えてきた課題については次に申し送りたい。 ・広く地域版便りを発信するようになると、様々な意見をいただくことができる。HPにあげることで乾隆学区以外の方にも見てもらえる機会が増えた。

学 校 関 係 者 評 価	分析を踏まえた取組の改善 ・地域の方と触れ合うことが増えてきたことは望ましいと思う。学校運営協議会の方との話だけでなく、地域を便り配付の折にでも歩き、話ができる機会を増やしていきたい。 ・地域行事に参加させていただいているとはいえ、主に乾隆学区である。大きく上京区全体のも始まっているが、他地域にアピールすることで新入園児を増やしていきたいと考える。
	(最終評価に向けた) 取組の改善を検証する各種指標 ・日々のつながりから、地域の方の声を受け止められているか。本園の状況を地域の方に理解していただいているか。 ・保護者アンケートや日常の保護者からの聞き取りから検証する。
	学校関係者による意見・支援策 ・学校運営協議会の理事会も今年度は顔を合わせての会になっているのがよい。 ・乾隆まつりや乾隆学区敬老会のステージで年長児と年中児が演技をしていたが、地域の中の幼稚園として今後も参加して行ってほしい。 ・幼稚園は畑をうまく利用しているが、地域の方からいただいた落いもやもち米の苗も活用して収穫に結び付けていることも継続していくのがよいと思う。

最終評価

自 己 評 価	(中間評価時に設定した) 各種指標結果 ・今年度も地域の便りの配布時に、直接出会える方とは話をして、園の状況を伝えるとともに地域の方の思いを聞くように努められた。 ・乾隆交通安全会の方には、小学校終了後幼稚園の登園時間までの見守りを1年間欠かさずやっていただいた。毎朝園長と話すこともできた。大きな情報源だと考えている。 ・地域版便りをHPに掲載することや門に掲示することは、乾隆学区の回覧板が届かないところには広報につながった。 ・アンケート結果③A96%B4%
	分析(成果と課題)、重点目標の達成状況、次年度の課題 ・学校運営協議会の理事会は3回すべて対面で行うことができた。様々な情報交換とご意見をいただくことができた。曜日と時間帯で参加しにくい委員の方があるので、次年度の課題である。 ・地域とのつながりの中で、もちつきの道具を貸していただいたり、掲示用の作品や年長児にプレゼントをいただいたりした。また機織り機の体験では、ゲストティーチャーに来ていただいたり、「おりなす館」の見学に年長児を招待していただいたりした。 ・今年度は多くの地域イベントに参加することができた。その中で地域の方の声を聞きくことができた。
	分析を踏まえた取組の改善 ・地域を歩き、地域イベントに参加することで、多くの地域の方とのつながりができる。この部分は大切にしつつ、ホームページの活用などを充実させていきたい。また今後に向けてはInstagramの活用も検討していきたい。 ・参加イベントが増えてきたときに、本園の園児数は年々減少している中で、子どもの負担になってはいけない。しっかり目的を考えて吟味して参加を検討したい。

学校関係者評価	学校関係者による意見・支援策 ・毎月、お便りをもらっているの、ホームページを含めて、幼稚園の様子がよくわかる。地域の者が自由に参観するのは難しいかもしれないが、そういう機会があってもよいのではないかとと思う。 ・学校運営協議会の時以外にも、気軽に話せる場面があるので、コミュニケーションは取れていると思う。
---------	---

（６）教職員の働き方改革について

重点目標	教職員一人一人が生き生きとした姿で子どもと向き合い、心豊かな生活を送る時間を確保する。
具体的な取組	・働き方改革の研修を行う。（年次有給休暇の取得促進） ・教職員一人一人が勤務時間を意識し、子どもと向き合う時間を十分に確保する。（教職員出退勤管理システムによる自己の勤務状況の把握） ・分掌の適正化を図る。（事務職員の学校運営への参画の推進・校務支援員の積極的な活用） ・会議の効率化を図る。（ＩＣＴの活用）
（取組結果を検証する）各種指標	・教員は子どもと向き合う時間を十分に確保できたか。 ・教職員の勤務時間への意識をしながら、意欲的に働けたか。（超過勤務の削減の目標値の設定） ・年休取得率 ・アンケート項目⑦「教職員は生き生きと働いている」

中間評価

各種指標結果	・働き方改革について、新任の者以外はすでに耳に馴染んでいる。研修等を通して、年次休暇取得や超過勤務削減への意識はついていると言える。 ・校務支援員の配置により、担任の子どもに向かう時間は確実に増えている。 ・アンケート結果⑦A92%B8%
自己評価	分析（成果と課題） ・総合育成支援員、校務支援員が本園に入る時間数をフルで勤務してもらえたことで担任の子どもに向かう時間は確実に増えたと思う。 ・本務者でないとできない分掌については、人数的に一人の受け持つ仕事は多いが、他の細々した仕事が任せられるようになり、極端に仕事の偏りはなかったように思われる。 ・会議は職員の勤務時間帯が様々であるため、必要最低限を短時間でできるように、出られない者への引継を考え実施してきた。 分析を踏まえた取組の改善 ・ＩＣＴの観点で、必要に応じてオンラインの研修が残っていることは、出張に直接行くより時短になる。対面でしなくてはいけないものとそうでないものは、企画運営側で吟味していくことが望ましいと思う。 ・教職員が意欲的である事と超過勤務が多い事とは別物である。日頃から研修等で時間を意識し、計画性や段取り力を身に付けるようにしていきたい。

	(最終評価に向けた) 取組の改善を検証する各種指標 ・会議の効率化を含め、働き方改革を意識した勤務状況であるか検証する ・年休取得率や超過勤務時間 ・保護者アンケートや日常の保護者からの聞き取りから検証する。
学校関係者評価	学校関係者による意見・支援策 ・アンケート項目で「教職員は生き生きと働いている」という項目の値がとてもよい。保護者の目にそう見えていることは素晴らしいと思う。子どもが楽しく過ごしていることとリンクしているので、後期も継続してほしい。 ・それぞれの教職員の自分の仕事を適切に行っていることが働き方改革につながっているのだろう。

最終評価

	(中間評価時に設定した) 各種指標結果 ・教職員の勤務時間をそれぞれが把握した上で、時間を意識し、提案内容や提案方法を見直してきた。教職員間の日常のコミュニケーションを図ることで設定された会議の効率化が図れた。 ・年休取得を働きかけたり、超過勤務時間が減るように声をかけたりする中で、問題のない勤務状況になっている。教職員の認識も高まっていると考える。 ・アンケート結果⑦A96% B4%
自己評価	分析 (成果と課題)、重点目標の達成状況、次年度の課題 ・校務支援員が昨年度よりメンバーが変わっていないので、勤務時間の範囲内で多くの校務をこなしてくれる。担任の負担軽減に大きくつながっていると考える。 ・コロナ禍が収束し集合研修できる時期になったが、オンライン研修、視聴研修に変更された研修も多くあった。園で使える時間が増えたことはゆとりにつながったと思う。 ・教職員間のコミュニケーションは年間意識した。働き方改革において互いに声をかけ合い、仕事の進捗状況等を把握することは重要である。 分析を踏まえた取組の改善 ・行事前や年度末など、仕事量の多い時期は、前もってわかっていることなので、計画的に仕事ができるよう考えていきたい。 ・個々の教職員の事情を互いに知ること、それぞれが効率よく仕事のできる場と時間を尊重する。分掌の適正配置は前提として、全体で動くべきものと個々すればよいものを職場チームとして一人一人の教職員が年間通して取り組めるようにしたい。
学校関係者評価	学校関係者による意見・支援策 ・ニュースで中学校の部活指導者が外部のものに変わってきたことを聞くが、幼稚園としては、校務支援員の導入が大きいのだろう。今後もチームとして取り組んでほしい。 ・前期に引き続き、アンケート項目で「教職員は生き生きと働いている」という項目が高評価である。教職員が元気で、子どもが夢中になって遊ぶ公立幼稚園の良さを続けてもらいたい。